

## 英国機械学会主催の国際会議で鉄道総研理事長が基調講演を行いました －日本の鉄道および鉄道総研の技術開発について講演－

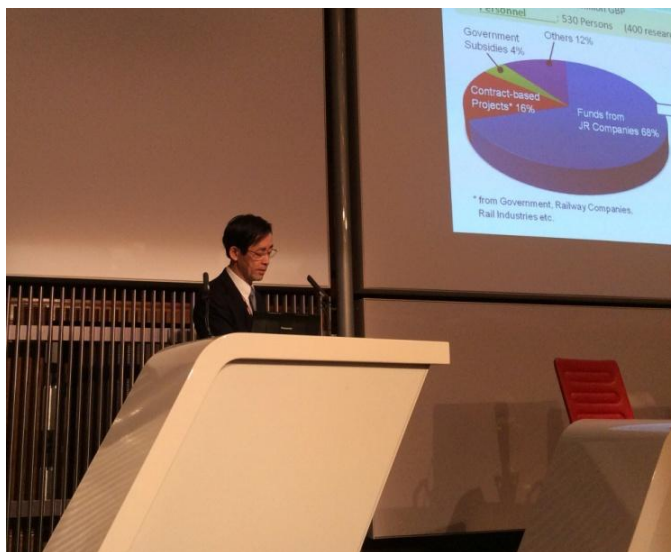
平成 27 年 4 月 24 日  
公益財団法人鉄道総合技術研究所

公益財団法人鉄道総合技術研究所（以下、鉄道総研）の理事長 熊谷則道が、去る平成 27 年 4 月 21 日から 23 日（現地時間）にかけて、ロンドン市内で開催された「スティーブソン会議」(Stephenson Conference)において、日本の鉄道技術と鉄道総研の貢献に関して基調講演を行いましたのでお知らせします。

英国機械学会（Institution of Mechanical Engineers）は、鉄道の父であるジョージ・スティーブソンにより 1847 年に設立された機械工学分野の伝統ある学術組織であり、その 8 つの技術部門のひとつに鉄道部門があります。ジョージ・スティーブソンにちなんで命名された「スティーブソン会議」は、上記鉄道部門が主催する新しい国際会議であり、鉄道車両を中心とした研究開発が主要な議題です。本会議には RSSB（鉄道安全標準化機構：英国）、ネットワーク・レール社（英国の鉄道インフラ保有会社）、ドイツ鉄道、TTCI（運輸技術センター：米国）などの内外の鉄道関係機関、ミラノ工科大学、シェフィールド大学などの鉄道分野に実績のある大学および世界の主要な車両メーカーなど、約 70 組織から約 150 名が参加しました。また、レールウェイ・ガゼット・インターナショナル誌をはじめとする複数の鉄道関係メディアも本会議に協賛しています。本会議においては、熊谷理事長の他に、ネットワーク・レール社の会長 リチャード・パリー・ジョーンズ（Richard Parry Jones）氏、RSSB の CEO クリス・フェントン（Chris Fenton）氏らが基調講演を行いました。なお、本会議の一般論文の総数は 80 件、日本からは鉄道総研車両力学研究室 研究員 田中隆之による発表を含め 2 件の発表がありました。

4 月 22 日 9 時（現地時間）に行われた熊谷理事長の基調講演では、日本の鉄道のこれまでの発展経緯とその日本社会・経済への貢献を概観した上で、鉄道総研および前身の鉄道技術研究所の鉄道、特に新幹線技術への貢献に関して紹介しました。中でも、鉄道総研が鉄道のさらなる安全性向上のために行っている地震に対する安全性向上のための研究開発、持続可能な鉄道を目指して行っている沿線環境問題や省エネルギーへの取り組みに関して、具体的な適用事例を交えて解説しました。

最後に、鉄道総研が今後の鉄道の発展とより良い社会の実現のために引き続き貢献していく決意を表明するとともに、世界の鉄道の発展のためには、国際的な連携・協調が不可欠であることを述べて講演は締めくくられました。講演後の質疑では、鉄道のコストダウンへの取り組みやマグレブの消費エネルギーに関する質問がなされるなど、日本の鉄道技術や鉄道総研の技術開発に高い関心が示されました。



基調講演を行う 鉄道総研理事長 熊谷則道



質疑応答の様子